

257. 平成8年度滋賀県下における 発掘調査の紹介(その3)

20. 国内2例目の鎮火祭祀を検出 長浜市東上坂町 墓立遺跡



火災住居跡(第11号)

墓立遺跡は、長浜の東北部に所在し、東には横山丘陵、北には姉川が隣接する弥生時代終末期から近代にかけての複合遺跡である。遺跡の中心時期は、弥生時代終末頃の3世紀前半とみられ、過去の調

査では、5棟の住居跡が検出され月影期の土器がまとめて出土した。今回の調査は、社会福祉施設建設の事前調査として約2,000㎡の面積で実施した。検出した遺構は、隅丸方形の住居跡17棟、土坑墓2基であり、中規模クラスの集落跡と考えられる。また、火災住居が2棟みられ、そのうち第11号住居跡は他の住居跡と比べ、7m×7mと大きく(5m×5mが一搬のサイズ)、集落の有力者の家と考えられ、検出面には焼土と炭化部材が散見していた。そして、住居跡の埋土を一枚ずつ丁寧に掘削したところ、西側隅部と東側隅部に土器が集中して出土し、東側のものは壁土と考えられる土と混入していたので、つくり付けの棚から落下して埋没したようである。また、西側のものは整然と並べられ完存率の高いものばかりであり、ほとんど火を受けておらず、床面に置かれた部分のみススが付着し、内面もわずかに黒ずんでいた。西側の土器群は、意図的に配置されたとみられ、高杯(大・小)、台付甕、甕2点、瓢形壺、ヤリガンノのセットであり、実用性の無いものが含まれるので、祭祀的な意義が感じられた。類例から、鎮火祭祀であることがうかがえ、過去例では僅少のため確認が困難であり、福岡県金山遺跡例し

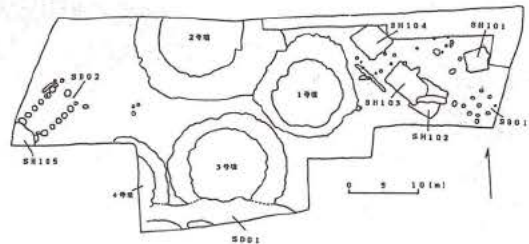
か鎮火祭祀として報告されたものは無く、しかも火災住居が鎮火し余熱のある段階で祭祀用具を配置して、祭祀を行ったことは3世紀の精神世界を支配した「鬼道」を検討する上で重要な発見である。

(長浜市教育委員会 西原雄大)

21. 中期から後期にかけての円墳を検出 長浜市東上坂町 柿田遺跡

今回の調査は東上坂ほ場整備事業に伴う発掘調査として、約5,000㎡について実施した。調査対象地区を東側調査区、西側調査区の2区に分けて調査を行った結果、東側調査区からは古墳時代後期の竪穴式住居10棟、円墳1基などが検出された。西側調査区からは竪穴式住居5棟と掘立柱建物2棟、古墳時代中期から後期にかけての円墳4基が検出された。ここでは主に西側調査区で検出された円墳について述べる。

1号墳 直径約12m、周溝幅約2m、深さ約0.6m。6世紀初頭～中頃に築造されたものと考えられる。
2号墳 今回検出したものの中では最大規模である。直径約16m、周溝約4.5m、深さ0.6～1.3m。築造年代は5世紀中葉である。長浜市内では初の出土例となる須恵器の大型高杯が出土している。円筒埴輪片も出土しているが、2号墳に伴うものであるかは検討を要する。また周溝北西部にのみ、墳丘の斜面と周溝外側肩部に拳大程度の河原石によって葺石が葺かれている。



西側調査区概略図

3号墳 直径約14m、周溝幅約3m・深さ約0.5～0.9m。6世紀初頭～中頃に築造されたものと考えられる。南側の一部がSD01と重複する。

4号墳 ほとんどが調査区域外のため詳細は不明。周溝幅約2m・深さ約0.6m。

柿田遺跡は寺院跡として周知されているが、今回の調査では寺院の存在を証明する遺物や遺構は得られなかった。当遺跡で古墳が見つかったのは初めてであり、貴重な発見である。特に2号墳は近接する上寺地遺跡で発見された西山古墳と同様、墳丘の斜面と周溝外側肩部に葺石が葺かれており関係が注目される。今回検出した5基以外にも確認されていない埋没古墳が数多くあると思われ、今後の成果が期待される。

(長浜市教育委員会 池崑陽一)

22. 周溝外側にも葺石をもつ円墳の調査
長浜市東上坂町 かみてらち 上寺地遺跡

上寺地遺跡は横山丘陵北部の西側に位置し、付近には茶白山古墳・山ノ鼻古墳・龍ヶ鼻古墳・垣籠古墳などの湖北を代表する古墳が存在する。平安時代の寺院跡として認識されてきたが、平成5年度からの県営ほ場整備関係の発掘調査では、直接寺院を示すような遺構は検出されていない。検出した埋没古墳は、茶白山古墳のすぐ西に位置し、字名が西山であることから西山古墳とした。

削平されているため、墳丘上部の構造は不明だが、検出された平面プランから直径約21mを測る円墳であることが確認された。墳丘の周囲には幅約3～3.6mを測る周溝がめぐらされており、周溝を含めた直径は約26.5mを測る。

西山古墳で最も注目されるのは、墳丘斜面と周溝外側の両方に葺石が葺かれる点である。墳丘斜面の葺石は人頭大の石を横長に使い、墳丘裾に並べて根石とし、若干小さい石を縦方向に並べ(区画石列)、それらにより区画された部分に石を充填する。一方周溝外側の葺



西山古墳全景(南から)

石には石材の配列に規則性がなく、^{こぶしだい}拳大ほどの小さい石を多く用いる。石材は、姉川から採集されたとおもわれる河原石がその殆どを占める。周溝外側にも葺石をもつ例は珍しく、県内では初例である。

遺物はすべて周溝内からの出土で、埴輪・須恵器などがある。埴輪は、円筒・朝顔形・蓋形^{きぬがさ}の立ち飾りが確認されており、その形状・調整などから西山古墳の築造は5世紀前半とおもわれる。ほぼ完形に復元される須恵器甕も出土しているが、TK23～47のものであり、少なくとも50年程は墓域として機能していたことをうかがわせる。

この他にも、平成8年度調査で埋没古墳3基を検出しており、湖北の古墳時代を知るうえで重要である。

(財滋賀県文化財保護協会 稲葉隆宣)

23. 横穴式石室導入期の一様相
マキノ町牧野 にしまさの 西牧野41号墳

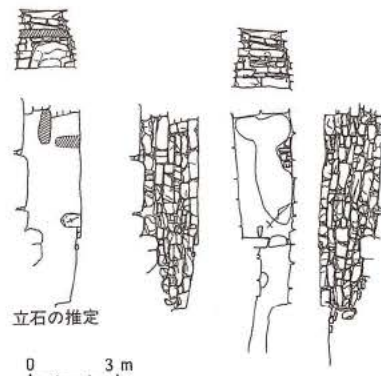
西牧野41号墳(斎頼塚古墳)は、石棚を持つ横穴式石室として知られていたが、付近に色濃く分布する製鉄遺跡との関係を解明する目的から発掘調査を実施した。調査の結果、当初の目的であった製鉄遺跡との関係については十分なデータは得られなかったが、導入期(6世紀中葉)の横穴式石室として興味深い内容が明らかになった。

第1の成果は、石棚の構造が明らかになった点である。奥壁と左(奥から見て)側壁に架構するという従来から指摘されていた点とともに、棚部分を境に奥壁が段構造を取るという点が明確になった。

第2は、棚下部に奥壁と並行する仕切りのための石材が置かれていた可能性である。あるいは石屋形との関係が考えられるかもしれない。

第3は、右側壁並行して袖部分から仕切りの石材が並べられていた点である。1石のみの確認であったが、屍床形成との関連が考えられる。

第4は、左側壁における突起石の確認である。石室



西牧野41号墳石室実測図

のほぼ中央部高さ1m程度のところに1m強の間隔で2石存在する。

第5は、羨門部に縦方向の石材を用いている点である。板閉塞とともに羨道部に特殊な意味が与えられていた可能性も考えられる。

大きくみて成果はこの5点であるが、いずれも北部九州から肥後地域に顕著に認められる特徴である。西牧野41号墳自体は、全体としては畿内的な横穴式石室であり、畿内的な構造の中に、九州的な要素がちりばめられたものと理解できる。横穴式石室導入期の混沌とした状況を示すものとして注目される。

(マキノ遺跡群調査団 細川修平)

24. 北山古墳の調査

虎姫町中野 虎御前山遺跡

北山古墳は虎御前山教育キャンプ場整備事業に伴う試掘調査によって確認された。墳丘は前方後円墳形を成しているが、周囲に多くの削平が確認されるため、断定はできない。主体部は長大な割竹型木棺の直葬で、木棺の規模は全長5.6m、幅0.85mを測る。副葬品は棺内から出土し、短甲・鏡・剣・刀子が確認された。

短甲は横剣板 鋸留短甲で、一般的なそれとは少々異なる技法で作られているようにも見えるが、整理調査中のため詳細は不明である。鏡は直径13.6cmの獣帯鏡で、舶載鏡と思われる。鏡面を上に向けて出土したことは興味深い。剣は全長0.70m、幅5cmの鉄剣である。刀子は全長12cmの鉄製である。

棺内はほぼ全面にベンガラが塗られており、鏡には水銀朱も付着していた。短甲・剣・刀子には布目や木質が残存していた。

副葬品の中から年代を決定できるものとして短甲が挙げられるが、前述のように一般的な短甲とは少々異なるため、確定するのは難しい。しかし、一般的に横剣板鋸留の技術は5世紀の後半あたりから導入されることから、当古墳の時期もこのあたりに位置づけたい。

今後の短甲の復原・整理調査の成果がまたれるところである。

(勸励賀県文化財保護協会 重田 勉)



北山古墳出土の獣帯鏡

25. 清水山城 主郭で大型礎石建物を確認 新旭町熊野本 清水山城 遺跡



主郭部礎石建物

清水山城遺跡は、饗庭野台地の東南端、標高約210m、平野部との比高差約115mの丘陵上に位置している。丘陵上からは、安曇川の沖積作用によって形成された高島平野を一望することができる。

城主については、高島氏の本城と伝えられている。

城は、山頂に築かれた主郭を中心に三方に伸びる尾根上に曲輪を配置する放射状連郭式を基本プランとする山城である。主郭部はL字形を呈しており、南北約55m、東西約60mの規模をもつ。曲輪の南側に坂虎口を設けている。

公園整備事業に伴い主郭部の発掘調査を実施した結果、主郭のほぼ中央より礎石建物1棟と礎石建物以前の焼土層を確認した。検出された礎石は、いずれも自然石で、長辺が、約25cmの大きさである。整地した後に裾付られたと考えられる。建物は、桁行6間(11.3m)×梁間5間(9.7m)の南北棟である。

建物西面より建物に接して階段状石組が確認された。階段状石組は、自然石、切石によって2段に構築されており、建物への出入口であったと思われる。また、建物の北西面から、かまど状遺構を検出している。

出土遺物は、16世紀中頃～後半に位置づけられる。土師質土器皿や瀬戸美濃天目茶碗、越前焼播鉢・甕などの陶磁器や銅製鏝、鉄釘約2百本、包丁、石硯などが出土している。

今回確認された礎石建物は、中世末～近世初頭における上流武士の住宅の様相を知る上で貴重な資料である。また、戦国末期の当城規模の山城の主郭部より、住宅風の大型礎石建物が確認され、生活を伺わせるような遺物が出土したことは、貴重な発見といえる。

高島氏の場合、山城・居館・家臣団屋敷の一体化が縄張の上で進められていたこととあいまって、県下においても築造技術水準の高さを知ることができる。

(新旭町教育委員会 横井川博之)

258. 甲良町見立野採集遺物について

1. はじめに 犬上郡甲良町は、ほぼ全域が犬上川の形成した扇状地にあたっている。かつては扇状地の山沿い部分に開発できなかった荒れ地が拡がり、「見立野」とよばれる疎林が見られた。見立野は現在の金屋・池寺・正楽寺・檜崎の四集落に囲まれた地域を指す呼称である。明治末期に茶園あるいは畑として一部開墾がなされたが、大半は近年まで荒地であった。戦後の食料増産運動の中で畑地への拡大がなされたが、現在見るような水田地帯へと変貌したのは、ほ場整備実施以降である。

今回紹介する資料は、昭和25年にこの見立野において採集した土器である。

2. 採集の状況と位置 採集された状況は、古墳の石室内に3点まとめておかれていたとのことである。石室の形状は不明であるが、暗く子供一人がやっと入れる程度の大きさであったとのことから、小型の横穴系の埋葬施設と考えてよいだろう。

見立野の中には、正楽寺古墳群・外輪古墳群・金屋南古墳群の3つの古墳群の存在が知られる。採集場所が正楽寺集落の西はずれであるということから、現状では確認できないものの、正楽寺古墳群に属する1基から採集したと考えられる。残念ながら採集後、この古墳は開墾により破壊されてしまったとのことである。

3. 採集遺物について ここでは採集された遺物(須恵器2点、土師器1点)について見ていきたい。

(1) 須恵器坏蓋で口縁の一部が欠損するが、ほぼ完形である。焼成は良好で、色調は灰色から灰褐色を呈する。外面には重ね焼きの痕跡を残す。胎土は長石・石英・くさり礫の小片を含む緻密なものが用いられている。成形法は切り離し痕を残すが、その周辺部のみケズリを施す。口縁部の外面にナデを施す。内面には採集時に「フタ」の墨書がなされる。

(2) 須恵器高坏で、完形である。焼成は良好で、胎土はやや大きな長石粒を含むが(1)とほぼ同じものである。成形法は、坏部のかえりをつまみ上げた後に端部を引き上げ、外面からナデを施す。脚部は引き上げた後、端部のみをシャープにヘラ切りしている。接合は、坏

部の底にカキメを施した後に脚部をナデにより接合し、脚部内面の接合部にのみケズリを施す。脚内面にはその際のケズリかすが付着したままになっている。坏部の底に施したカキメは一部ナデ消されており、現状で8条が確認できる。坏部と脚部の接合が歪んでおり、作りはやや雑な感を受ける。坏内面には「台 ソナエルモノ」、脚部内面に「昭和二十五年四月二十二日 犬上郡東甲良村見立野 織田信長ソノタ佐々木高綱墓トイワレル」と、採集時に墨書がなされている。

(3) 土師皿で完形である。焼成はやや不良で、胎土は長石・チャート・くさり礫などの微粒を含む、非常に緻密なものである。色調は淡赤褐色を呈する。轆轤によって形成した後、端部外面を一段横ナデし、更に細部にナデを施してシャープな稜を作り出す。切り離した後、痕跡を指で押しえ消している。

以上の3点であるが、年代観から2群に大別できる。

(1)と(2)については7世紀初頭頃のものと考えられる。

(3)については、近代以降の所産であろう。

4. おわりに 今回紹介した資料は、犬上郡甲良町東長寺在住の大橋義一氏が、亡くなられたご子息の形見として大切に保管されてきた資料である。また目下のところ、正楽寺古墳群についての唯一の資料として非常に貴重なものであり、このような貴重な文化財を大切に保管していただいたことに対して感謝の意を表し、発表する機会をいただいたことについても重ねて感謝する次第です。

(助)滋賀県文化財保護協会 重岡 卓



図1 位置図

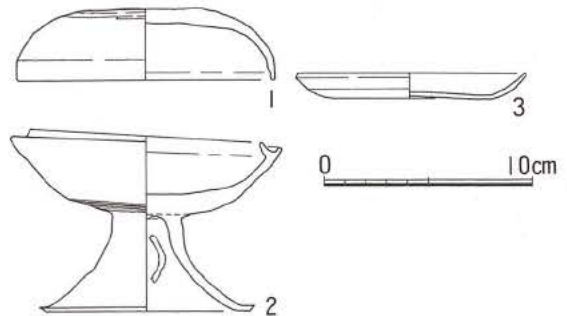


図2 採集遺物実測図・写真